

## 「歯科補綴物の品質管理と歯科技工士」

大澤 孝

現在の歯科技工業務形態は大きく分けると2つに分類されます。一つは院内技工で、昔はどこかの歯科医院でも技工室の設備があり、そこでは歯科技工士または歯科医師が歯科技工を行っていました。もう一つは歯科技工製作を院外の歯科技工所へ委託する外注技工です。

近年、歯科医師は歯科技工を行うことはほんの一部を除いて殆ど聞かれなくなりました。一方、歯科技工士は専門技能が高く評価され、歯科補綴物などの製作はほとんどが歯科技工士にシフトしていると言って過言ではありません。これは他の医療従事者と同様に完全に分業化された医療システムの一つと思われれます。

しかし、現状は歯科技工士の専門技能を患者のために十分に発揮できる環境とは言えないところがあります。それは補綴物の品質管理と関係が深く、よい補綴物を求めていく先には、現在の歯科技工士が抱える諸問題解決の糸口が潜んでいると私は考えています。

さて、歯科技工士が担う院内技工は歯科医師が歯科技工士へ直接指示することができますが、一方の外注技工は歯科技工指示書を介しての指示になります。外注技工は歯科技工業務形態の違いから連携方法に制約があり、結果として院内技工では見られないトラブルが生じています。その成否の鍵を握る歯科医師と歯科技工士間の連携方法は、歯科技工業務形態によって対処の仕方が違うと考えられます。一般的に歯科技工士の業務は余裕の無いぎりぎりの時間で進行していることが多く、最悪の場合は再製作となりそれまでの苦労が徒労に終わります。これまでに歯科技工にまつわる辛酸を嘗められた方は多いことでしょう。

本講演では、過去10年以上収集した技工製作物の再製作の問題など、いくつかのデータを参照しながら、補綴物の品質管理の試みについてご紹介します。また、私のこれまで経験した臨床事例を紹介しながら、私見をまじえて歯科技工士の将来展望について考えてみたいと思います。